

岡本公樹著

東北 不屈の歴史をひもとく

評・三浦 佑之

(古代文学研究者)
立正大教授

一年が過ぎた。とんでもなく長いような、瞬く間のような、留めておかなければならないことは多い。あらゆるものが失われ傷つけられ

何度も再生してきた東北

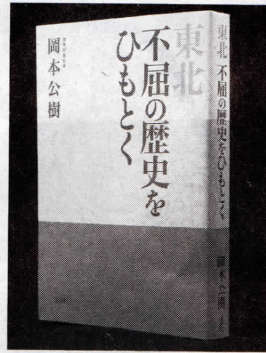
られる東北があり、貞

観地震と大津波、十和

田大噴火、慶長の大津

波やたび重なる飢饉などの天災が東北をねらい撃ちする。そのように何度も何度も打ちのめされる東北だが、そのたびに立ち上がり再生する力が東北にはあるということを著者はくり返す。侵略に対しては、伝説的な英雄アテルイが、出自のよくわからない安倍氏が、そして東北文化を代表する藤原三代が、「不屈の歴史」を彩る。もちろん、その根底を支えるのは名も無き民たち。

東北に長く駐在した新聞記者である著者が、歩き見て聞いた記録がもとになっている。地元の専門家や研究者の見解をもとに、忘れられた論文を掘り起こし、じつに読みやすくて確な東北史を書き上げた。その文章にも内容にも、今こそ周縁としての「東北」の側に立って考えるべきだという熱い思いが溢れている。



社談講
1400円

てしまった今、どうすれば自分たちの土地に誇りをもって住むことができるのか。おそらく著者は、そのことを考え続けている。そして、歴史を考えるとというのはそういうことになければならないと私も思う。

国家が成立して以降、中央の支配者は時々変わるが、いつも中央によって支配され、中央に奉仕させられ続ける辺境として東北はあった。その視座を打破しようとする試みが明確になったのは、近年のことだ。しかし、その方向性の正しさを証明したのが、3・11という大惨事だったというのは皮肉なことである。

人が誕生する以前の大地の形成か

◇おかもと・こうき 1972年、神奈川県生まれ。読売新聞記者。現在金沢支局次席。